

わたぼうし新聞 第9号

発行者 わたぼうし連絡会
発行日 1986年(昭和61年)3月10日

第9号の特集 友だち

よろこびが集まったよりも
悲しみが集まった方が
しあわせに近いような気がする

強いものが集まったよりも
弱いものが集まった方が
真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも
ふしあわせが集まった方が
愛に近いような気がする

この新聞は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考え等を出し合い、主義、主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

第9号の特集 友だち

このコーナーはあるテーマについて、さまざまな人たちに意見を述べてもらうコーナーです。今回のテーマは「ともだち」です。

真の友と普通の友 地域住民・障害者

僕にとって友だちといっても二つの型があります。一つは真の友、もう一つは俗に言う友だち(幼稚園・学校時代から現在まで付き合いしてきた友)です。

真の友とは精神的な面での友、すなわち相手の悩みや悲しみを自分のものとし、真剣に考え、いざというときは駆けつけて相談に乗り、励まし合いが出来る間柄だと思います。たとえ問題の解決にならないまでも、そのことがどんなに励みになることでしょう。

又、相手のために自分を犠牲にしてまでも時間を割き、愚痴や悩みを聞いてあげる。相手の人が間違った考えを持っている場合は、あえてそのことを指摘し、その考えを正しくすることが出来なかったら、自分の意志に反しても突き放すことも真の友としての大きな役割だと思います。そういう間柄だったらこそ、友人Nさんと結婚した今でも家族ぐるみで交際できるのです。

しかし、友だちとはいっても、長く付き合いしていくのは難しいことです。どんなに幼いときからの友といっても、生活環境、それぞれの立場、健康状態によってその関係が変わっていくのではないのでしょうか。昔からのことを色々思い出してみると、僕も幼稚園の時にはそれなりに、仲良しの友だちが5人ほどいました。

でも、小学校に入ったときには、クラスが変わると以前の友とあまり話さなくなり、病気の進行と共に普通学校では体がついてゆけなくなり、小学3年で養護学校へ転校してからは、地域の幼友だちとも全く話す機会がなくなっていました。

体もだんだん動けなくなるに連れ、自分の心も閉鎖的になり、無口になってしまいました。そうなると、親しかった幼稚園、小学校の友もみんな離れ、養護学校では親しい友だちも出来ませんでした。

学校を卒業してからは、時々みんなからは電話がかかってくるのですが、自由にみんなと行動が共に出来ないために、自分だけが取り残されたような孤独感に襲われることがあります。

それに僕は実際的に友人と付き合い方も不器用というか、いつも悩んでいることがあります。それは相手が他の友人と話し合っているときは、心から打ち解けて楽しそうに見えるのに、僕が中にはいると何となく、しらけムードになるような気がするのです。みんなの中にすんなり入って行けない面があるのかも知れませんが、それが僕の最大の課題です。

真の友、友だち、その点僕は根本的に少し違うのではないかと、僕なりに勝手な判断をしています。

自分にとって友だちとは

盲学校生

表面だけでワイワイやっている友だちだけでなく、その中でも、心のつながり、信じ合えることは友だちだと思う。同じ環境にいるから、友だちには何でも言えるし、自分と同じ立場に立って、考えたり、感じたりして気持ちをわかってくれる。

不満に思ったことを言っても、聞いてくれて、ストレスが解消したこともあるし、嬉しいこと、いやなこと、何でも一緒にしてくれて、感じてくれて、そういうことで、救われたこともあるから、友だちって大切だなって思ったし、心の支えになっています。

男友だち、女友だちについては、全然区別なくみんな男女とも仲がいいです。

私が入っているプラスバンド部は10人で、女は私一人であとは全員男だけれど、いやだと思わないし、かえって楽しいです。

介添え歩行というのがあって、付き添って歩く歩行練習をするのですが、男女関係なく、お互い声かけあっているせいもあって仲がいいです。

でも、仲がよいからって、友だちに何でも言えるかというのと、やっぱり言えないこともあるけれど、ただ、男友だち、女友だちにはないものが、感じられるからホッとしています。

女友だちには言えないことはないし、女だから解ってもらえることがあるから、その点では、男友だちよりも女友だちの方が話しやすい。

だから困ったことがあるとほとんど友だちに話をします。話をして解決はしないけれどホッとするから。

一度お友だちについて、考えさせられたことがありました。「ずっと友だちでいようね」って約束した友だちが、いつの間にかお互いに心が離れてそれきりになったことがありましたが、その時、約束して作るものではないこと。約束することで期待しすぎ相手を縛って、だんだんそれが窮屈に思え、結局壊れてしまうから、自然に自分の支えになっているのだと思えるのが、友だちだと思いました。

友だちとは 地域住民・障害者

- 一言で言えないけれどね、・親友 暖かい目・友だち 思いやり
- ・友だちに対してどういう関係かというのと、疲れない関係。
- ・友だちを作る方法 お話すること。

事務局より

障害故に限定された人間関係の中でしか、接触できない状況の中で、友だちの意味を考え、そして、その中の問題を共に考えていくことは大切なことです。

いや、それは障害者だとか健常者だとかでなく、現代の社会にとって再度見直す重要な点かも知れません。今、一度前向きに本当の友だちを作る努力をする中から、新しい生活環境が得られるのではないのでしょうか？

今は親友を必要とするよりも、気安く時を過ごせる人間でいればそれでいいと、考える風潮が支配的で、そのためかえって深刻な人恋しき渴きが、若い心の底にうずいているのです。友だちの喜びを貴方は素直に歓迎できますか？考えてみましょう。（H. A）

人・ひと・ヒト 人物紹介

E.Hさん

・住所：障害者用住宅。家賃16,000円抽選に当選して、その後自分の希望を入れながら住宅設計をする。

・家族構成：お母さんと二人暮らし。

・身体状況：脳性小児麻痺・少し歩ける。普段の生活は電動車いす。

・趣味

①編み物。人に頼まれて編んで上げたりしている。(15年前より)
団体から表彰され、本にも掲載されたりしている。

②手作りのはがきづくり

作り方

(1)牛乳パックを洗濯機にかける。

(2)乾かしてから、パックの表面をはがして、真ん中に入ってる和紙をとる。

(3)和紙をミキサーにかける。

(4)紙すきをして手作りはがきを作る。

③音楽鑑賞：フォーク。

④詩を書くこと。

・経歴：施設→県営住宅（現在）

・夢

①編み物で収入を得たい。

②仕事をもらいたい。

③車いすで自由に行きたい。(望むこととのつながり)

- ・ イベント等への参加について
 - ①ほとんど参加していない。
 - ②年に一度キャンプに行くくらい。

- ・ やってみたいことは？
 - ①旅行→沖縄、北海道へ行きたい。

- ・ 望むことは？
 - ①（人）道に段差があって車いすで上り下りが出来ないとき手伝ってくれる人が欲しい。
 - ②（社会）障害者が外に出られるように、施設整備をして欲しい。道路段差等の整備。最近、施設がやっと設備が整ってきた。車いすで自由に歩きたいから、道路設備などを整備して欲しい。障害者を差別しないで欲しい。同じ人間としてみて欲しい。特に言語障害を差別しないで欲しい（友人に言語障害の人がいるから）話す時間がかかるといって無視されるが、聞こうとすればわかるはずだ。（聞く耳を持っていればわかる）

- ・ 日常生活について
買い物によく行く。「大和」「109」等、生活で困ることはない。

- ・ 外によく出ますか？
外に出ようとしている。障害者が家に引っ込んでいることはないと思う。昔は人に見られると恥ずかしいと思ったが、一度出してみると平気だった。外に出ることは必要だと思う。（時代の移り変わりも大いに関係している。）

- ・ ボランティア活動に対して
いろいろな問題があって続けることが難しい。

- ・ 好きな言葉
「人とは一粒の言葉はとこしえがない」マザーテレサ「ものに対して終わりはない」という意味。

- ・ 現在の状況は？
教会に行くことが、生きて行くことの支えになっている。価値観や考え方が変わった。（洗礼を受けて10年）

本田さんのお宅は、障害者用住宅で家賃16,000円。抽選で当選し、その後、設計に自分の考えを取り入れた後に設計をする。非常時にベッドの上にあるボタンを押すと2階に住んでいる人が駆けつけてくれるシステムになっている。

—取材：上野・中野・荒水—

団体紹介コーナー

「青山彩光苑」演劇クラブ

現在、クラブが発足して3年目を迎えます。クラブ員みんな、不自由な体に「負けてなるものか」という意気込みで頑張っています。

一昨年「ヘレンケラー」、昨年「かぐや姫」を苑の文化祭で上演してきました。これらは大変好評で、昨年は七尾市の老人ホーム『城山園』との交流も行いました。

さて、今年の活動の一環として、去る6月14日に県立婦人会館にて、医王病院の劇団「アカシア」によって上演された『小さな一歩』を観劇に行ってきました。

新スタッフも決まり、「外見ばかり良くて、中身が全くないなあ」と言われないように、一生懸命頑張ります。

今年は『ベニスの商人』を上演する予定です。現在は台本も仕上がり、10月25日（日）の文化祭に向けて練習中です。皆さん見においで下さい。また、苑外でも上演を考えております。

連絡先：〒926 七尾市青山町ろ部22番

「青山彩光苑」演劇クラブ

☎(0767)57-3309

「わたぼうし文芸コーナー

=詩=

私の手 地域住民・障害者

私の手は普通の手だけど
ちょっとちがう
えんぴつで名前も
満足に書けない
だけど私にはすばらしい
右手があるんだ
タイプがある
これは私のえんぴつなんだ
手紙も書ける
詩も書けるんだ
タイプがあるから楽しいんだ

あさのさんぽ

地域住民・障害者

今日は5時に目がさめた
いつもより痛みがひどくなかった
あたりは薄暗かった
電動車いすで散歩に出かけた
行けども
行けども
家はぼつぼつとしかたっていなかった
とても気持ちのいい朝だ
痛みしに手にまさぐれば
ロザリオの玉のぬくもり心安らぐ
ロザリオの玉のつるつるわが手より
おちれど今にここにいちれんおえる

君への贈り物 地域住民・障害者

君にあげよう たんぽぽの花
君にあげよう 風にくるんで
だから 涙をふいて 風にほほえんでごらん
光りの中から 春の匂い 君へ流そう
山なす緑 君へ流そう 木に映して
だから 涙をふいて 水にほほえんでごらん
しぶきの中から 夏の匂い 君へ送ろう
ふるさとの空 君へ送ろう 雲にくるんで
だから 涙をふいて 雲にほほえんでごらん
木立の中から 秋の匂い 君へ届けよう
カンパス 君へ届けよう 渡り鳥に託して
だから 涙をふいて
渡り鳥にほほえんでごらん 北の空から 冬の匂い

5月の空

地域住民・障害者

5月の日差しは 母さんのようだ
暗く 悲しいとき
黙って 包んでくれる
5月の風は 母さんのようだ
優しく 励ましてくれるように
ほほをなでて通る
5月の空は 母さんのようだ
やわらかい 青色は
幼い日の お乳のようだ

・募集中!! 文通してみたい人 友だちをつくりたい人 投稿を待っています。

「わたぼうし新聞」の読者へインタビュー T.Nさん

～施設生活について思うこと～

インタビュー：「わたぼうし新聞」編集委員2名

Q. 当新聞に一言。

A. 投稿者が偏りすぎている。毎回同じ人、同じ地域ばかりである。

Q. 施設生活で感じること。

A. 施設生活している人の立場が良くないし、障害者自身が施設を選択できない。

Q. 昨年7月より施設入所者にも、処置費の自己負担制度が出来ましたが、これについて一言。

A. この制度によって、もっと権利を施設側に主張すべきでなかろうか。

Q. 施設生活していて、一番望みたいことは。

A. 「やっぱり、社会復帰」ある程度、仕事となると範囲が限られてきている。その中でもその仕事をしていって、腕を磨かなければいけない。

今ダスキンの選別の作業をしているが、何年かたってある程度腕を磨けば、一般の人でも認めてくれると思う。自分の能力を外に対して、認めてもらう努力を絶えず行っている。

Q. 施設から出たいと思いますか？

A. やっぱり出たいと思う。

Q. 一番出たいと思われる点は？

A. こんな言い方は偏見に思われるかも知れないが、施設で酒は飲めない。もし、施設でなければ、自分の部屋にボトルの1～2本置いてあっても不思議でないが、施設にいと、回りから白い目で見られる。そんな面では孤立化している。

Q. 集団生活においては、どこにいても規則を守っていかなければ、みんなと一緒に生活していけないと思う。でも、酒を飲んで酔っぱらうことはどこにもあること。

A. いつも同じ人ばかり見ている。仕事が終わっても同じ人と顔を合わせている。車で通勤している人は、帰宅する間に会社のことを忘れることが出来る。

Q. 会社からくたくたになって帰ってきて、ゴロンと横になって、好きなときにご飯を食べて、好きなときに風呂に入って、好きなときに寝て、それが「また明日頑張ろう」という気になる。施設の場合はリラックスの方法は、どんなふうに行っていますか？

A. 時間が経って忘れるしかない。

Q. 僕ら会社で働いている場合は、仕事が終わってから友だちと喫茶店に行って、コーヒーでも飲みに行くことが出来る。しかし、施設の場合はこんなことが出来ない。

A. そんなに会話っていうものがない。朝から晩まで同じ人の顔を見ているし、話題性がない。

Q. そういった面で寂しいですか？

A. 施設での生活というのは、平日は作業に勤めて、休日は話をしたり、本を読んだり、テレビを見たり、たまに外出する程度でしょう。

Q. そうすると、年金というのは、ほとんど小遣いの足しですか？

A. 小遣いと将来のことを考えて、貯金ということも考えて行かなければいけない。何か良い話があっても、お金がなかっただけで出来ないことがあるので、そんな面を考えると、預金をしておく必要があると思う。

Q. 作業賃金でも、一般の工場働いて月15万円もらっているところが、施設では極端に少なかったりすると思うが、それでも施設にいて仕事を覚えると、社会生活が出来るのでは？

A. ある人もいる。

Q. そういう人は、社会復帰をしようという気持ちはあるのかな？

A. 根本的に考えたら、一般の人と変わらないだろうし、「施設に入っている人は金がなくとも、食堂に行けばご飯はあるし、寝るところもある」というけれど、それやったら空しいと思いませんか？

施設にいても、自動販売機があるし、金がなかったら何も買えない。ただ「施設や」という意識があるだけで、みんな同じだと思う。

Q. 施設生活という意識は、どういう形で表れますか？

A. 施設の中では、常に他人を気にしなければいけない。

Q. 例えばどんなふうに？ 僕も施設生活の経験者ですが、一つは、本当に自分一人になれる時間が少ない？

A. それは言える。

Q. 集団生活の中では、ものすごく妥協した中で物事を考えていく面があると思う。せっぱ詰まったことでなくてもあると思う。

障害者が一般社会に対するアレルギーみたいなものがあって、外の刺激に対して億劫がっているのではないか？

A. いや、違う。逆ではないか。今絶対逆や。

Q. 割と社会といたら、少しは障害者の立場をより良くしようという理解はあると思う

が、僕が町に車いすで出て歩道に段差があると、中には気にかけて車いすを押してくれる人もいます。

- A. 逆に現在の健常者というのは、二通りあると思う。一つは無関心という感じ、避けて行くという感じ、もう一つは、べったりと着いて来るという感じ。

我々に対しては、べったりではいけない。障害者の要求に応じた関わり方をしなければいけない。例えば、階段を一生懸命に降りているところに、手を持ってもらってもかえって困るときがある。静かに見守ってくれる方がありがたい。もし、汽車に乗るとしたら僕としては、自分の歩く速さを計算して乗り降りしているのだから・・・。

- Q. 甘えて、人に手助けして欲しい。逆に「障害者だから助けてもらうのは当たり前だ、障害者も同じ人間なんだから、障害者も何の意識もなく負い目も感じなくて暮らして行けるように、社会構造事態が政治的な力などによって、変えて行くべきだ」という意見。

- A. 何もしなくても、ちゃんとしっかりした目があればよいのではないか。転んでも起こしに来る人よりも、起きるまで見届けてくれる人の方が必要なのではないのでしょうか。

- Q. 例えば、町の中を歩きたいなあとか、海辺へ行きたいなあとか、特に砂浜など行ったら車いすがはまってしまって困るときがある。車いすがはまっていることに対して、人はどう思うかなど考えるときがある。

- A. わざわざ一人汽車に乗って帰らなくても、迎えに来てもらえばよいと思う。どちらの方が強いかというと、やはり一人でかえた方が強いと思う。わざわざ迎えに来てもらうよりも、一人で行った方がよいと思う。

- Q. さっき、言われたたとえば、駅の階段を上がるときに転んだときに「大丈夫か」と声をかけて、手を貸してくれるだけでも良いと思う。そのときに「大丈夫です、ありがとうございます」というだけでも良いと思う。

- A. 「大丈夫や」といっていても、ただ上がるまで見ているのは、一番嫌い。

- Q. 世間一般に見られる障害者は、体の不自由な方、弱者と表現の仕方がされる。その弱者である部分は、体のハンディであるから、誰しも障害の程度は様々であるが、「ハンディがある」という言葉で片づけられて、みんな一律の見方をされていないか。

- A. 何故、眼鏡をかけている人は、障害者でないの。目が悪いから眼鏡をかけているのだから、その人も障害者でないのか。

眼鏡をかけて、自分の障害を棚に上げて障害者を見て「はかや、ばかや」と言っている人がいる。

- Q. 僕らでもよく言うが、「眼鏡をかけている人は障害者ではないのか」もし、五体満足なら眼鏡はいらないのではないか。それでは、眼鏡を外したら目が見えないのではないか。障害者自身が、いろんな人と接することに対して弱いようである。障害者の道の専門家という人は「わしら、何でも解っている」というところがある。

最後に、今、一番社会に対していたいこと、今思っていることは？

A. アメリカに行きたい。

Q. それはどういう目的？

A. 福祉の勉強、ダスキンの会社で10ヶ月間の海外研修がある。「一人アメリカに派遣するだけで、3~400万円の費用がかかる」といっている。これは日本リハビリ協会の主催で後援はミスタードーナツです。

Q. 今日はどうも長い間ありがとうございました。

T.Nさんについて

脳性小児麻痺の障害で、幼いときから中学時代は石川整肢学園で生活し、その後石川県立養護学校高等部に入学し、卒業後は加賀市の南陽園（重度授産施設）に入所されています。

仕事はダスキンの選別の作業をしていらっしゃる、クラブ活動はフォークソングクラブの部長として頑張っています。

そのT.Nさんに編集委員が2名、南陽園に出向き、インタビューを行いました。

インタビューの当時は28歳。出身地は七尾市和倉町。最後にインタビューから期間が大幅に過ぎ、掲載が遅れたことをお詫び申し上げます。(編集者)

自由投稿コーナー

原発つくっていいかなあ？

匿名者

能登に原発が作られようとしている。本当に安全なのだろうか？

昨年春にソ連で原発の事故があって、多数の放射能がヨーロッパ地域をひどく汚染してしまった。日本は遠く離れていたこともあり、被害はほとんどなかったが、ヨーロッパではひどかったらしい。本当は今でも、これからも放射能付けといっても過言でないような食べ物から水を採っていかなければならないらしい。

臭い、味、まして目に見えない低いレベルの放射能は、今私たちの体を蝕んでいてもわからない。その被害は3年後かも知れないし、10年後、20年後かも知れない。という長い目で見ないとわからないという点でやっかいだ。

原発。原発の事故が起きたら、障害者を含めた我々の生活が一瞬にしてダメになる。安全という点で100%元に戻らない。そういう意味で我々はもっともっと原発のことに関心を持たなければいけないと思う。

盲人同士の結婚は、まず一人歩きが出来るかどうかである。一人歩きが出来ないと何も出来ない。これは最低の条件である。

一人歩きについては、自分自身が努力すべきことはもちろんだが、その意欲をなくしてしまうことがある。「危ないから歩くな」ということなのだ。

それでも、何とか一人で歩いていると今度は「あの人は一人で歩いているじゃないか。家の人は一切何を考えているのだ」という会話が聞こえてくる。これを言われると辛い。道が悪くて歩きにくいとか、音響信号がないことよりずっと辛い。私たちの一人歩きを理解してもらうには、やはり歩くしかない。

次に親の反対である。不安というのが本当であろう。我が子の能力を半分くらいしか理解していない親が多い。それに身だしなみがなっていないとか、そういうことが相手の親に悪感情を与えてしまう場合がある。このことは、自分で努力すべきことなんだが、両親に反対されたとき、あきらめるか、これを押し切るか決めなければならない。もし、反対を押し切って結婚しようとするなら二人とも一人歩きが出来なければならないと思う。

今後起こるであろう様々な事柄を、出来るだけ自分たちで処理しなければならないからである。最後に住まいの問題である。家やアパートを借りようとする、「絶対に火を使わないこと」という条件が付けられることがしばしばある。いくら電気で埋め合わせをしてもガスが使えないと、食事に変な影響を及ぼし、暖房もかなり不便になってしまう。もう少し私たちのことを理解してくれればと願うだけだ。

そのほか様々な問題があるのだろうが、この三つが大きな問題であって、これらの問題に悩んだことのない夫婦はどのぐらいいるのだろうか。

「のぞみちゃん」の場合にしても、両親に反対されたそうである。この番組が全国に流れたことで、少しは私たちのことを理解されてきたと思う。色々な場面があったが、はっきり二人の結婚を読みとれる場面で、そのことを言葉で話してくれればと思うのである。無理な注文であろうか。

本の紹介

にんげんだもの

植田 みつを著 文化出版局 ¥1,500

人間は常に弱きもの、欲深きもの、偽り多きものでないかと思います。そしてそれらに悩まされ、自己嫌悪に陥ったとき、又、心の底から嬉しいとき、ひとりぼっちで辛いとき、悲しみに耐えるとき、そんな時にこの本を。

面白く付き合う女の子の本

中山 あいこ著 青春出版社 ¥600

女の子としてこの世に生まれてきた以上、チャーミングに明るく相手を魅了してしまう。レディのたしなみを身につけてこそ本当の女の幸せが生まれる。時にはハメを外し、時にはオセンチになり、女としての自分を出し切らないと、世の中面白く生きられない。そんな魅力的な女の子の生き方を大胆な語り口で書き下ろした本です。

編集後記

季節の移り変わりが早く、いつの間にか夏が来てしまいました。異常気象？だそうですが、北陸に住む私たちにとって、雪のない季節は、あちこち動き回ったりでき、大切な季節には違いありませんね。

この『わたぼうし新聞』もようやく9号まで来ました。新聞の目的がわからない、中身がない等々と、ご意見されながら続けさせていただいていますが、私たち編集に携わっている人たちは、全く偶然から出会った人たちで障害者問題も福祉問題も、何もわからない人たちばかりです。

ただ言えるのは、私たちが私たち自身で地域社会に役立てるのは何なのか？障害者と健常者が同じ人間として、仲間としてつながり会えるキッカケを、作るとしたら何ができるか？を考え、そんな中から集まった人たちです。

ビジネスとしてやっているわけでもなく、一定の主張を持っているわけでもなく、一人の人間として、この新聞が先の「私たちの社会に対して出来ることの一つとしての交流の場づくり」を唱えるキッカケとなったら、と思いつつやってきました。

仕事を持ちながらの活動故に、多くの意見にもなかなか対処できませんが、出来るだけ読者の意見を反映できるよう努力していきたいと思います。発行が遅れ遅れになっていることを心よりお詫び申し上げます。

次号のテーマは「介護とは？」です。街で見かけた障害者に喜ばれる場合と、反対に断られる場合等ありますが、健常者、障害者それぞれの立場からどう考えますか。(H. A)